英文学演習ＸＸ

サブタイトル	ギャスケルで読むヴィクトリア朝期の社会と人びと
担当者名	大石 和欣
単位	1
年度・学期	2019 秋
曜日時限	金2
キャンパス	三田
登録番号	14274
設置学部・研究科	文学部
設置学科・専攻	人文社会学科（文学系）英米文学専攻
学年	2, 3, 4
分野	専門教育科目英米文学専攻選択必修Ａ

授業科目の内容・目的・方法・到達目標

　ヨーロッパ大陸の西に位置するちいさな島国イギリスがパクス・ブリタニカの旗印をかかげて世界の海と植民地を掌握しようとしていた時代、その西端の町が噴煙をあげながら工業化への道を猛進していた。そこで生産された綿織物はインドや近隣アジア諸国を中心とした世界の市場を支配し、世界の工場イギリス帝国の土台を支えていくことになる。
　ヴィクトリア朝期を代表する作家エリザベス・ギャスケルは、そんな急変貌をとげていくマンチェスターを小説の舞台とすることで、いわゆる産業革命がひきおこした社会の変容とそこに生きる人びとの生活問題を赤裸々に提示した。それまでの文学作品では抑圧されることの多かった労働者や売春婦の悲惨な生活実態、産業資本家たちの富と自負と苦難、さらには都市の環境問題といった社会現象は彼女の小説の中心テーマである。国家の繁栄を保証するはずの産業化が生みだした社会悪を告発した目撃証言ともいえよう。もちろんそれはマルクスやエンゲルスたちが共産主義の立場から糾弾したものではあるが、ギャスケルは女性の視点から、人びとの悩みと惨状を虚構として物語っていったのである。そこにはユニタリアン派牧師の妻としての強固な宗教的信条も宿っている。
　この授業ではギャスケルの代表作『北と南』をとりあげ、そのなかにヴィクトリア朝期のイギリスが内包した活力と病理、栄耀と貧困、都市と牧歌の相克を読み解いていく。今から150年以上前にグローバル化の波にさらされていたマンチェスターは輸入する綿花の価格や国際競争に大きく左右され、人びとの生活も浮沈を繰り返す。イギリスの南部からやってきた主人公マーガレットの目を通して北の新興都市の状況が小説には描かれているが、そこから何をわたしたちは読みとることができるのだろう。ギャスケルの短編や同時代の作品・資料も参照しながらじっくりと考えてみたい。それは文学が持っているはずの社会的意味を問う行為でもあろう。
　授業は毎回課題のテクストを読みこんでいきながら、ヴィクトリア朝期の文学と社会との関係について参考文献も参照しながら考えていきたい。同時代の他の作品や社会史的な資料、あるいは研究文献も渉猟し、ときにＤＶＤをみながら、じっくりとテクスト分析をすることで、文学研究・批評の基礎を身につけてもらえればと思っている。

授業の計画

第1回
エリザベス・ギャスケルとマンチェスター
エリザベス・ギャスケルの伝記的背景を俯瞰すると同時に、彼女の作風や作品の位置づけを文学史のなかで考えてみる。とくにディケンズやカーライルなど同時代の作家・文筆家との関連も把握しておきたい。

第2回
短編　「リジー・リー」の読解
ギャスケルの短編「リジー・リー」を読解する。農村から都市へと移住する人びとの生活体験とその浮沈の物語を分析すると同時に、作品から解釈できる社会的・宗教的意義について考えてみる。

第3回
批評を批評する
いわゆるポスト・コロニアリズムなどが浸透したために小説を批評するというのはますます悩ましい行為になっていることは間違いないが、そもそもギャスケルについて批評するとすれば、どのような批評がありえるのだろう。2、3編ほどの批評（抜粋）を参照しながら考えてみたい。

第4回
『北と南』Part 1
主人公マーガレットがイングランド南部の村ヘルストンで送る生活の記述について分析する。農村共同体、父親の宗教的懐疑、家族のあり方についての語りを問題にする。この時代の男性と女性の領域分離という社会史的な問題についても議論する。

第5回
『北と南』Part 2
南部の農村から北部の新興都市ミルトンへ移り住んだヘイル一家の衝撃的な経験についての記述を分析する。近代的産業都市を描くという大きな課題に対してギャスケルがどう対処しているのかを考える。

第6回
『北と南』Part 3
労働者のニコラス・ヒギンズと娘ベッシーとの出会いと交友関係、そして産業資本家ソーントンとの出会いを中心にして物語は展開していく。彼らの人物描写に焦点をあて、何が読み取れるか考えてみる。

第7回
『北と南』Part 4
ソーントン宅での晩餐会において、マーガレットはソーントンたちが掲げる自由主義経済および資本主義に対する絶対的信念を疑問視し、批判することで、論争になってしまう。同時代における経済論や政治経済言説を参照しながらその意味について分析してみる。

第8回
　『北と南』Part 4
ソーントン宅での晩餐会において、マーガレットはソーントンたちが標榜する自由主義経済の妥当性を疑問視し、批判することで、論争になってしまう。同時代における経済論や政治経済言説を参照しながらその意味について考えてみる。

第9回
『北と南』Part 5
ソーントン宅でマーガレットは労働争議に巻き込まれ、ソーントンの無責任な態度を叱咤したものの、ソーントンが労働者たちの暴力にさらされたときに思わず彼をかばうことで負傷してしまう。その直後ソーントンはマーガレットにプロポーズするが、激しい言葉とともに拒絶されてしまう。クライマックス場面の一つである。その一連の出来事を追いながら、グローバル化のなかでマンチェスターが置かれた経済的位置づけ、労働組合の問題、この時代の男女の関係について考えてみる。

第10回
『北と南』Part 6
ベッシー・ヒギンズの死、さらにはヘイル夫人の死を描くことで小説は宗教的なテーマを前面に押し出していく。ギャスケルが属したユニタリアン派とは何か、また夫ギャスケル牧師とともにギャスケルが共有した信条とはどういうものであったかを考えながら、それらの場面を読み解いてみる。

第11回
『北と南』Part 7
母を見舞いにきた兄フレデリックは見つかれば死刑になるお尋ね者である。彼を駅まで見送ったマーガレットは運悪く騒動に巻き込まれ、兄をかばうために警察に嘘をつくことになる。この「嘘」という重大な罪過を軸にしてソーントンとマーガレットとの関係が微妙に揺れ動いていく場面を精読してみる。

第12回
『北と南』Part 8
労働組合をめぐる一連の行動についてマーガレットから批判されたヒギンズは悔悛してソーントンのもとで働き始めることになる。ソーントンもまたマーガレットの批判を受けて雇用条件の改善を試みることになる。この時代は労働条件や環境が社会問題として議論される一方で、労働環境の改善や工場法成立を見た時代でもある。それらについての資料を参照しながら、ギャスケルの小説を分析してみる。

第13回
『北と南』Part 9
母に続いて父ヘイル氏も急死してしまったため、マーガレットは孤立無援の状況におちいってしまう。当時の中流階級の女性たちがおかれた社会的状況を踏まえて、マーガレットの苦境を物語のなかから読み解き、ジェンダー問題として批評を試みる。

第14回
『北と南』Part 10
名親であるベル氏も急逝したために、マーガレットは彼の財産を相続する。一方で、良心的な工場経営を心掛けたソーントンは市場競争に生き残ることができずに倒産してしまう。すでにソーントンへの想いを強めていたマーガレットは、自分の財産をソーントンに「投資」することを申し出る。その瞬間マーガレットへの愛情を捨て切れずにいたソーントンとマーガレットが結ばれることになる。この時代における女性と財産との関係を考えながら、分析してみたい。

その他
課題
『北と南』もしくは産業小説、関連作品について学期途中、学期末にそれぞれレポートを提出。

成績評価方法

出席態度60%（発表を含む）。レポート（2回）40%。

テキスト（教科書）

Elizabeth Gaskell, *North and South* (Penguin Classics),1996 ISBN-13: 978-0140434248
それ以外の資料や作品（抜粋）についてはコピーを配布する。

参考書

松岡 光治（編）『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（溪水社、2010年)など
参考文献一覧は第1回目の授業で配布する。

担当教員から履修者へのコメント

文学のテクストをきちんと精読することをまず心がけてほしいと思います。そのうえで歴史的な文脈のなかで読み直すことで、ひとつひとつの表現の裏に潜在している含意を掘り起こしていく面白さを味わってもらえればと思っています。文学を読むことからどんな世界が見えてくるのか、それをグローバル化する現代世界に生きているみなさんの感性と知性ですなおに把握してもらいたいと思っています。

質問・相談

質問があれば　oishi[at]boz.c.u-tokyo.ac.jp までご連絡ください。（[at]はアットマークに変更してください。）

© Keio University. All rights reserved.　- ver.P.011.fv0m -